

学 位 論 文 要 旨

氏 名 井ノ崎 敦子

題 目 学生相談における女子学生の恋愛相談への支援のあり方に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本博士論文は、学生相談における女子学生の恋愛相談への支援のあり方について検討することを目的としている。

昨今、わが国の大学教育は、全入時代に突入し、以前と比べて多種多様な学生が在籍するようになった。そこで、学生相談も、修学適応支援にとどまらず、恋愛相談のような多種多様な相談への支援を行うことが求められているが、その実態に関する研究は皆無である。

大学生の恋愛は、安定した自己において自分自身のアイデンティティの補強することを求める「アイデンティティのための恋愛」と指摘されている。しかし、学生相談で恋愛相談をする学生らの多くは、未熟な自己を補強することを求める「自己のための恋愛」を示す。

Kohutが提唱した自己心理学によれば、自分以外の対象との間で、心理的に支えられているという体験、すなわち自己対象体験を適切に得ることができなければ、自己の発達には阻害され、未熟な状態に置かれる。このように未熟な自己である学生の恋愛が「自己のための恋愛」と考えられる。

また、女子学生は男子学生に比べて、親密性の発達がアイデンティティの発達と連動しやすいと指摘されている（例えば、杉村，2001）。従って、女子学生の恋愛相談への学生相談での対応は、女子学生の人格発達にも影響を与えることが予想されることから、学生相談における女子学生の恋愛相談への支援のあり方を検討することが重要であると考えられる。そこで、本博士論文では、①学生の恋愛の発達と自己の発達との関連についての検討、②学生相談における恋愛相談の実態の把握、③学生相談における女子学生の恋愛相談への支援のあり方の自己心理学的観点からの検討という3つを目的とした。

本博士論文の第2章では、大学生を対象として、恋愛の発達と自己の発達との関連を検討する調査と、学生相談従事者を対象とした恋愛相談の実態を把握するための調査によって、女子学生において恋愛の発達と自己の発達とは関連がみられること、また、学生相談従事者の多くが恋愛相談に対応しており、また取り扱っている事例は、恋愛関係継続時の支配関係にまつわる相談が最も多いことを示した。

さらに第3章から第5章にかけて、具体的な恋愛相談事例についての事例研究を通して、恋愛相談への支援のあり方について検討を行った。

第3章では、卒業期に来談した恋愛関係成立前の問題で悩む女子学生の事例を取り上げ、平均的な応答性を有する養育者であっても、ふだんの応答性が機能しにくくなるような大きなストレス体験をもつ者の場合、応答されないことによる自己の発達への阻害が見られ、その結果、恋愛の発達が影響をされること、そうした学生への支援としては、潜在的な情動への理解を踏まえた共感的応答が求められることを見出した。

また、第4章では、中間期から卒業期にかけて来談した、恋愛関係成立時の悩みを抱える女子学生の事例を取り上げた。この事例では、支配的な養育者によって適切な応答を得ることができないため、自己の発達が阻害され、恋愛の発達が阻害されていたことを見出された。そこで、カウンセラーが、第3章と同様の共感的応答を示すことや、共感的応答を伴う助言が効果的であったことを見出した。

第5章では、大学院学生期に恋愛関係継続時の悩みを抱えた女子学生の事例を取り上げた。この事例では、依存的な養育者によって適切な応答を得ることができないことで、自己の発達は阻害され、恋愛の発達も阻害されていた。そこで、カウンセラーは、第3章と第4章と同様に、共感的応答を行うことで支援をしたことが効果的にであったことを見出した。

以上ことから、本博士論文では、学生相談で恋愛相談を行う女子学生の中には、自己の発達が阻害されたことにより、アイデンティティのための恋愛に発達できず、自己のための恋愛にとどまる学生が存在すること、そうした学生には、カウンセラーが、共感的応答により支援をすることで、自己の発達と恋愛の発達が促進されることを見出した。

今後は、他のジェンダーを示す学生にも同じような支援が効果的であるか、また病態レベルがより深刻な学生にも同様の支援が適用可能かどうかについても検討することが必要である。